面の最も廣き新聞紙なり

時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報社電話番號 百四十

新報

明治廿七年三月廿一日 水曜日
舊曆甲午二月十五日（壬戌）
日出午前五時四十五分 日入午後五時五十二分 月出午後五時三十六分 月入午前五時三十分 滿潮午前五時十三分 午後五時三十四分
（西曆一千八百九十四年）年始より八十日 年末まで二百八十五日

●廣告料定價● 時事新報の廣告料は都て定價の通り申受くる筈なれども取次人の内には往々定價以下にて引受くる者ある由今後斯る事實を發見する時は直ちに其取次人に對し本社廣告の取次を謝絶する事もあるべきに付豫め廣告依賴者諸君に公告す

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を填塞するより各社同一の記事を掲ぐるもの尠からず偶々時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依賴せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し為めに行違ひを生じたる場合も尠からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報社に達したる投書の原稿は凡て寄稿者に返戻せず又本社に保存せず

時事新報

孟買航路

日本郵船會社が内國の綿絲紡績聯合會社と契約を結び印度より輸入する棉花を運送の為め孟買の航路を開きたるは實に昨年十一月の事なり其次第を尋ぬるに近年來日本の紡績業は非常に發達して隨て原料たる棉花を要すること一方ならず而して其棉花は從來英國彼阿會社の船舶にて孟買より輸入したるものなれども運賃は一噸に付き印度貨幣十七ルーピーの割合にして甚だ廉ならず然るに棉花の輸入は紡績業の發達と共にますます其量を增すのみなるが故に斯る高價の運賃を看す外國船に貪らるゝは實に馬鹿らしき次第なれば内國船をして孟買の航路を開かしめ運賃を減ずるを得策なれとて紡績業者及び綿商賈に從事する五六の人々は郵船會社に向て請求する所ありたれども同會社にても現在の船舶は夫れ〳〵既定線路の往復に忙しくして海外の航海に使用す可き餘裕とては非ざる其上に棉花の運送も彼阿會社の如く一噸十七ルーピーの運賃なれば非常に利益もある可けれども請求者の如く大に之を減ぜよとありては收支の計算立ち難しとて容易に應ぜざる折柄、孟買の商人にタ、氏なる者あり本來波斯人にして綿絲棉花の製造商賣に從事し同地にて屈指の豪商なるが近來印度の綿絲が兎角日本に賣れざるより實況視察の為めとて我國に來り日本の紡績業は案外の盛逹にして印度の綿絲の如き迚も競爭の限りに非ざるの事實を發見して今後の策は只原料の棉花を賣付くるの外なしとの商案を決したるものならん同氏も兼てより彼阿會社の運賃を不相當なりと思ひしものなれば日本の同業者中に棉花直輸入の議あるを聞て大に之を贊成し日本人にしていよ〳〵直輸入を企つるに於ては同氏も亦相當の船舶を出して共同の責任を執らんとの案を申出したるにぞ郵船會社も茲に至りていよ〳〵坐視するを得ざることゝ為れり本來同會社が孟買航路の開始に躊躇したるは船舶不足の事情もあり第一には收支の計算立ち難きが為めなりしなれども綿絲紡績業者より懇々の請求と云ひ又タ、氏の申出と云ひ日本唯一の航海會社として内外に屬望さるゝ郵船會社たるものは國の面目に對しても捨置く可きに非ず成敗利鈍は後日の論として姑く擱き兎に角に其事を試みんとの議に決して當業者の請求を容れ會社とタ、氏とは雙方より二隻づゝの船舶を出し都合四隻の船を以て孟買日本間の棉花運送に從事することゝなしたるが最初郵船會社に向て請求したる者は五六の會社に止まりしかども愈よ事の成らんとするに至りて同業者の加盟を申込むもの頗る多し即ち郵船會社は右の綿絲紡績聯合會社に對して以上の船舶を以て通常每三周間一回を目的とし運賃は一噸に付き十三ルーピーの割合に定め一箇年間に五萬俵の棉花を輸入するの約束を結び其約束は十箇年間繼續することゝして茲に郵船會社と聯合會社との契約は全く整ひ郵船會社は右の契約に從ひ昨年十一月より孟買の航路を開始することゝなりたり抑も事の始めは内國の綿絲紡績業者が彼阿會社の運賃不相當に高きが為めに郵船會社の開航を促し其會社も止むを得ずして之に應じたるものなれども其成行は論なく彼阿會社と競爭の地位に立たる事にして事體容易ならざるものあるが如し是れより先き我會社にて孟買航路開始の企あるや彼會社の役員等は此事を聞知りて恰も忠告するが如く恐嚇するが如く我に對して其企の不利を鳴らして事の中止を望みたるよしなれども固より中止す可きに非ざれば其儘にして格別取合はざりしに彼も亦其儘にして止みぬりと云ふ蓋し彼の考に於ては例の日本人の金なれば永續きのす可き筈なし其中には自から疲れて自から倒るゝことならんとて深く意に介せざるものゝ如くなりしに爾來事の成行を見れば聯合會社の結合はますます固くして其契約は着々實行せらるゝの有様なるにぞ此儘に捨置き難しと思ひたるにやならん彼會社の香港支店長は倫敦の本社に到りて協議せしよしにて從前十七ルーピーの運賃を遽に引下げて遂には僅に一ルーピー半と為し又印度より支那に輸送する阿片の如きも一箱に付き十九ルーピーなりしを一ルーピーに減じて大に競爭を試み以て我航路を壓倒せんとするの色を現はしたるぞ由々しき大事なれ顧みて内の有様を見れば聯合會社の結合固からざるに非ず又その契約も嚴ならざるに非ずと雖も聯合會社が郵船會社の船舶に搭載す可き棉花の量は一箇年五萬俵を限るの約束にして其他は何國の船に搭載するも勝手なれば我商人たるものも彼會社の低運賃を利して約束以外の荷物は動、彼に托するに至らざるを得ず又郵船會社の運賃は最初十三ルーピーの約束なりしもタ、氏の印度に歸るや彼地の事情止むを得ざるものあればとて十二ルーピーに減額の旨を申來り會社に於ても之を承諾するの止むを得ざるに至りしより左なきだに收支如何を氣遣ひたる計算はますます狂ひを生じて斯る次第にては契約の維持も如何あらんと當局者の心配一方ならざりしが聯合會社の人々も茲に見る所ありて更に協議を凝し運賃は十二ルーピーに減じたれども聯合會社にて輸入する棉花は其運送を悉皆郵船會社に托し一俵たりとも他の船舶に搭載せざることと為し又郵船會社に於ても前の四隻の外に更に臨時船を使用して運送の便を謀ることゝ為し從來の約定期限十箇年を二十箇年の期限に改めたり即ち今回郵船會社と聯合會社との間に契約の追加を要するに至りし次第にして目下の處にては内部の結合ますます固くして他の競爭も先づ以て恐るゝに足らざるが如くなれども更に將來の成行を考ふれば大に掛念す可きものあり我國人の等閑に看過す可らざる所なり

（以下次號）

雜報

○十七取引所の發起認可 前號の紙上に高田及び伊勢崎取引所の發起認可を得たる次第を記せしが是は去る廿七日のことにしてそれと同時に認可を得たるもの左の都合十七箇所なりと云ふ

姫路	（米穀）	明石	（米穀）
宮津	（米穀）	久留米	（米穀）
七尾	（米穀）	掛川	（米穀）
甲府	（米穀及蠶）	高田	（米、木綿、絹絲）
福山	（米穀）	坂出	（米穀）
伏木	（肥料、鹽、石油）	京都	（油）
伊勢崎	（織物、雜穀）	大坂	（雜穀）
大坂	（銅、鐵）	横濱	（棉花、綿絲）

●取引所の不認可 十七取引所の發起認可を得たると同時に不認可の指令に接したるものは左の十箇所なり

福光　石動　礪波　津澤（以上富山縣）
東播　尼ケ崎（以上兵庫縣）
小千谷（新潟縣）
大分　秋田　山口　大坂（石炭）

●願書却下の取引所 熊谷、福知山（以上米穀）門司、七尾（商品）の四取引所は願書に不完全の點ありて却下せられしよし

○帝國生命保險會社 は保險金額既に九百萬圓に上り社務次第に繁多なるより今回事務擴張の為め保險業に精しき森下岩楠氏を聘して事務を囑託する由

○日本鯨獵會社 は目下株金募集中にて其申込意外の盛況なれば開業は來月下旬なるべしと云ふ

○明治火災保險會社と兵庫倉庫會社 去月十八日兵庫倉庫會社の藏先に就きては貨物の保險金拂渡しに關し保險會社と倉庫會社の間に紛紜ありし由は兼て記載せしが明治保險會社丈は愈よ保險金拂渡しの方針に決し過日同社專務取締役阿部泰藏氏は燒失地へ出張の上保險金を拂渡さんとせしが倉庫會社にては被保險者にかゝはらずとて燒失貨物の處分に躊躇し今に損害結算の請求書をも差出さゞれば隨て損害高も不明にて未だ金員拂渡しの場合にも至らねば阿部氏は尚ほ同地にありて目下談判中なりと云ふ

○大坂株式取引所の近況 近來大坂株式取引所の市況は頗る盛況を極め日々賣買出來高の多き之を二三年已前に比較せば實に數倍の增大を致したるは畢竟年に月に賣買株額の增加し且從來の經驗に就て見るも價格激變に際し證據金の不納抔云ふ等の弊害なく賣買手堅くして自然客筋一般の信用を受けし結果ならんと

○京都七條倉庫會社の賣却 京都米穀取引所にては從來三萬圓の資金を今回六萬圓として三萬圓を增加し附屬倉庫を建築せんと既に農商務大臣の認可を經たるに七條倉庫會社は米穀取引所の買米を出入する所にしてその株主は米穀取引所の株主と同一なれば同倉庫會社を現在のまゝ買買せんと既に相談一決して同倉庫會社は臨時株主總會を開きいよ〳〵金三萬圓にて米穀取引所に賣却することゝなりたるよし

○[illegible]樣 ・・・下手の上手

傍觀生

人足繁き大道の曲り角に古ぼ
け大小五六の藥品を載せてす
獨逸の大醫ゲルマン先生の直
の春に昔床しき總の暴愛、長
直い〳〵と濁聲あげて怒鳴る
一枚の上に風船球やら錦繪箱
ぬ物を所狹く並べ散らしなん
んでも二錢と五厘、隅から隅
き調子をとりて囃るものあり
のと見ゆれが貴いものなら
なら四五十は必ずつける、れ
何方にでもつける、斯う附け
ばカチン〳〵と叩いても大丈
るものあり凡て七輪方も口が
に來掛かる三四人連の樞正直
の出放題も眞に受けてはゐれ
に遁へたる折柄、以前の二人
寄り一人が夫れとなく眼を遣
與ふれば一人は切に擔頭に
〳〵と次の店先に移るときト
りながら抑て此方から劍突を
ばチコは受取りて手早く
々と立去るべし、それは
知て居るとなれども大道で
先づあんなものなり
されどモサの中でもホヤ〳〵
れよりも簡單にして所謂ボタ
き簡刀一丁所持して人込の場
み巾着や蝦蟇口のポトリと落
なり去年樂地の
の別稱を重ねて情や外行の
のわり取られた金高は
しだみれよりも尚ほ簡單なる
ず女帶抔を切取るゝとにて
なり縮珍の上帶ならは
溜めては賣拂ふなりとぞ
込入て少々六
して革包の中味を摸取り
て金目の物を奪取るなり
する上は場所柄にもよる
東京なれば先づ鐵道馬車
夕方六時頃には新橋停車場
限なれば新橋日本橋間の
みぞ夥しきものなり夕暮
て打取る如く長途の旅に
ら唯善き旅客取らんとて
て買いふとせんためなるべ
オイ上海道の箱が着くには
杯違て寒やかか、ウヌ善か
くまり態度とてなく一區毎
も無限往來するも他人の
馬車代は正當に拂はず
き馬車の進行し居る途中
がわるもれら下りるよ
眼に暗ませ其儘ずいと下りて
なりわずか三四錢で二三
みれ丈にて休みく〳〵の